

生徒と楽しむSDGsを通じた
アクティブな学校づくり(1)

蒼下和敬

1. 「どうせなくなる…」

筆者は現勤校に着任して5年になる。最初の頃は戸惑うばかりであったが、今では、突発的な出来事にあたふたとする事はあるものの、生徒とともに充実した日々を過ごしている。だが、現勤校は近隣校との統廃合によって、あと1年で閉校となる。すでに1年生は入学しておらず、3月で3年生は卒業し、今の2年生の9人が残るのみとなった。筆者は、この学年の主任兼担任を担当しているが、生徒たちを見ると、減りゆく生徒や教職員、縮小されていく行事やフロアごと使われなくなる校舎といった現実接しながら、「どうせなくなるし…」とつづやいたり、後輩が入学してこないことで「末っ子」感が残り、主体性や自立性等を育む上でも閉塞感を感じることも増えてきた。どのようにすれば閉塞感を脱して、学校全体が活性化する

ような教育活動を展開できるかが大きな課題となっている。

2. きっかけは行き詰まりから

教職員は、少しでも充実した教育活動になるよう努めている。地歴公民科でも、新しい学習指導要領を先取りする形で、班による研究発表形式の授業を増やしたり、家庭科と連携して食文化に関する実習を行う等工夫に努めてきた。筆者も、2学期前半に3年生において、新学習指導要領解説で諸課題を探究する学習の好例として挙げられている「SDGs」(持続可能な開発目標)の学習に取り組んだ。

生徒は、SDGsで示されている「1」の課題目標を、「1」のグループに分かれて調べて、その結果をプレゼンテーション形式で発表した。こうした形態の授業は何度か行っており、授業自体はスムーズに行うことができたが、限られた時間の中では、各班の発表が質疑応答や授業者のまとめを含めて10分程度になっただけで、一つひとつの課題目標を深い学びにつなげていくことに限界を感じていた。

この授業には、校長が参観に来ていた。校長にこのことを相談したところ、校長は「この(再生可能エネルギー)班の発表は理科的な側面も入るとおもしろい。家庭科などとも連携できる。

カリキュラム・マネジメントを活かして発展させてみてはどうか」と助言があった。後日、家庭科・保健の各授業担当者に校長の助言を話したところ、「それは日々の授業に価値付けができるし、おもしろい。今の響高だからこそ、恐れずにやってみる価値はあると思う」と賛同を得た。こうした経緯から、後半期の半年をかけて、校内全体でSDGsを軸にした教育活動に取り組むこととなった。

3. 「SDGs」学習の土台作り

SDGsを活かした活動を始める前にSDGsを理解していたのは、一部の教員の他には、きっかけとなる授業に参加していた一部の3年生であった。まずは、活動を本格化させる前に、次の点について、すべての教職員・生徒がSDGsについて理解できるようにした。

SDGsとは

・「Sustainable Development Goals」の略。日本語では「持続可能な開発目標」。

・2030年までに、各国や企業、団体、個人があらゆる垣根を越えて協力し、よりよい未来を作ろうと国連総会で採択された「17」の目標。

・コンセプトは「だれひとり取り残さない」。

最初に職員研修を行い、右記の概要を説明し、SDGsが各教科や活動、社会的要請の強い「〇〇教育」などの内容を、「さまざまな社会的課題に向き合う学び」として紐付ける役割を担い、それぞれの学習内容の意味付け・価値付けを強化し得ることなどを説明し、教育活動に取り入れることを提案した。

続いて、全校集会の際に、SDGsの概要を説明し、あらゆる授業や行事などの活動で学んだことが「SDGs」のどの課題に向き合うことができるものか」という視点から学校全体で学びを深めていくことを話した。



テーマごとにシールにした SDGs ロゴ
(SDGs ロゴは国連広報センターから)

4. 活性化の秘策は「シール」
 響高校では、SDGs を軸とした教育・学習活動を「Hibiki SDGs Project」でひひとり取り残さない」というキャッチコピーの下で一つのプロジェクトとして取り組むことにした。このプロジェクトを推進する上で、SDGs のロゴに注目した。SDGs ロゴは、「この課題目標一つ一つにシンプルでかつカラフルなイラストが描かれている。これを見た教職員から、「こうしたオシャレなデザインをシールにして、授業の時に配付して、教科書やノートに貼らせたなら、楽しそうに取り組むのではないか」と提案があった。

6. 生徒の声を取り入れて：
 シールは、学習内容に関連付ける目印として教科書やノートに貼付けることを想定していたところ、プロジェクトを始めて間もなく、生徒から「せっかくだから、スタンプリーマーに台紙に貼りたい」という意見が複数寄せられた。そこで、試しに作って配付したところ、

5. レリバンスを高める効果
 例えば「再生可能エネルギー」について学習している授業で「7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに」というシールを配付する。再生可能エネルギーについては、地歴公民の他、理科、家庭科、保健、英語、現代文、総合等あらゆる場面で取り上げている。それぞれの指導場面で「7」のシールを配付することで、各教科の学習内容が紐付けられていき、「この学習はSDGs の何番に関連付けられるのか」という、生徒の学びの意味づけ（レリバンス）を高める効果があり、同時に授業者自身が教材の価値を再認識できた。

7. SDGs の基礎学習
 SDGs の内容自体に対する学び（2年生）は、地歴公民科が学習指導要領に示された諸課題を探究する学習として取組んだ。授業では、Eの班に分かれて、各課題目標を調べてプレゼンテーションを行うことにより、全体で学びを共有できるように計画した。発表資料（資料はコピーされ生徒に配付される）を作成する際には、SDGs ロゴとタイトルを入れること、各課題の具体的な事例とその背景、実際に取組まれている対策を示すこと等を指示したが、基本的には大部分は各班の裁量に任せ、生徒は、これまでの取組から、



授業等で集めたシール

8. 各教科・活動での定着効果
 地歴公民以外の各教科でも、日々の授業でシールを通したSDGs に関連付ける取組を行った。この効果は大きく、授業者が「この内容は○番と△番に係するね」と関連付けると、生徒の方から「○番とも関係しませんか」という声が自然と上がるようになり、授業をインタラクティブにしたり、教員が生徒から学ぶ機会を得たりすることができた。
 次号では、活性化のための具体的な手立てとその効果について報告させていただきます。
 （山口県立響高等学校）



SDGs の基礎学習（発表時）のようす

SDGs に対する関心は持っていたようで、日頃の授業に対する取組姿勢とは明らかに異なる様子であった。